

おし図書館

No.102

発行 青木和子
TEL 0477-3110886
104416

千葉市立中央図書館を

見学して

大久保ヒロ子

人口92万人の政令指定都市千葉市の中央図書館を見学しました。中央図書館は、千葉駅から歩いて8分という住宅街にあり、生涯学習センターとの複合施設で、4年前に建設されました。

千葉市の図書館の概要は、中央図書館の他に地区図書館が6、分館が6、公民館図書室が21ありま

す。今回見学した中央図書館は、全面がラス張りで、非常に明るく広々としていた。窓の外には木々の緑が見え、窓際にはたくさん

の椅子席があり、ゆっくりと読書が楽しめるような、素敵な図書館です。

入口を入ると「子ども本を

楽しもう」というテーマのもとに、長年読みつがれた絵本が壁いっぱい展示されていました。一番奥には円形の「おはなしのへやし」があり、年令別に、定期的におはなし会が行われています。絵本コーナーでは、お母さんが我が子に読み聞かせをしている姿が見られ、大人に気がねなく子どもに本を読んでもあげられる図書館が松戸にも欲しいという嘆きの声を思い出し、羨ましい限りです。一階には他に、児童文学、ヤ

ングアダルト、ビデオ視聴、障害者サービスなどがあります。特に雑誌コーナーは充実していて、一般誌が100をはるかに越えるタイトル数があり、二階には、社会科学、自然科学、芸術、文学など、各分野別に（さらにスポーツならば、サッカー、野球、ゴルフなど）それぞれ雑誌コーナーがあり、その数の多さは驚きです。

全体に、机や椅子も非常に多く、屋外の読書テラスも落ち着いた雰囲気の本が読めそうです。他には、図書館の資料を使っている研究個室が15室用意されています。

短い時間だったので、館内を充分に見学できなかったのは、心残りでした。

見学の前に、「千葉市の図書館を考える会」の方々と、館内のグループ研修室で交流を持ち、千葉市の図書館の現状や松戸の課題などを話し合いました。

午後は、「考える会」主催の「松元ヒロ・ソロライブ」を聞き、心底大笑いし、明日への活力を養いました。

千葉市立中央図書館へ

行ってきました

吉田 えみ子

「あー！「オーツ」！「すばらし」！「うらやましい！」連発の「学報告はどうしても書けませんので、どうぞ千葉駅東口を出て中央図書館、生涯学習センター」の立派な案内板のとおり、緑色のゆるい坂道を10分足らず上ってください。逆三角形の硝子窓の目立つ建物に着きます。

車椅子でも書架の間を自由に動け、本を手に出れますし、子ども連れでも大丈夫。広い子どもコーナーで紙芝居を楽しんでください。お腹が空いたら、美味しいレスト

ランもあるし、持ち込んだお弁当を開く場所もあります。火曜（金曜は、夜9時まで閉館しています）から、ひとり個室で研究をし、学習机も利用し、また雑誌新聞コーナーや、窓辺の沢山の椅子のひとつに座って、松戸の未来を夢見るのもいいですね。だから一度、見学をおすすめいたします。

さて、当日は「千葉市の図書館を考える会」の皆様が図書館の一室に案内してくださって、お話をうかがいました。図書館長かと思った、代表の高梨さん、19年も図書館にお務だった方、重い病気を克服して車椅子で参加なさる会員の方など、皆様熱意に溢れていました。この「考える会」を創って14年経ち、10年目にこの中央図書館が建ち、4年過ぎたところ。また、前進を続けて行くと、熱心に語ら

れました。

千葉市民92万人の人口の多々や市の広さから考えると、ひとつだけ充実しても満足していません。利用者の子どもから高令者までが歩いて行ける範囲にもっと多くの「図書館」が建つように、働きかけを続けていくそうです。

その中で4月に、花見川図書館、花見川田分館が3倍の広さにリニューアルされ、環境も良い、図書館らしい図書館ができたこと喜ばれ、利用者数も3倍に増加したとの事。

「松戸は分館が19もあって、いいですね」と言われましたが、数が多いだけで、実際は「分館」であるわけです。中味の充実した、利用しやすい設備が整ってこそ、「分館」を誇れるようになると思います。

松戸では、新設の願いが遠のいた今、既製の館のリニューアル、

リフォーム、点検も、目標のひとつになるのではありませんか？
「千葉市の図書館を考える会」の次の例会も、図書館内で開かれます。私たちの会が、松戸の図書館内の部屋を会場として使える日が来る事があるのでしょうか？



図書館友の会全国連絡会

第一回 交流会

報告 青木 和子

3月8日(火)、日本図書館協会での交流会に参加しました。
竹内惣理事長と松岡要事務局長

の挨拶と資料室見学。そして交流会——全国連絡会発足までとその後の経過報告、会計報告、世話人紹介と挨拶、参加者の自己紹介と活動報告の後、自由な意見交換を行いました。

会の発足に向けて、また、その後現在に到るまでの世話人の皆様のご尽力に敬意を表します。全国から18グループが出席。遠くは、香川や福岡からの参加もありました。

18のグループがあれば、個々の問題を抱えて、18通りの活動があります。民間委託や指定管理者制度導入に関する問題意識は、共通のものであります。情報交換をしながら、問題に対応していきたいと思われました。

交流会の2時間は、あつという間に過ぎてしまいました。今後の会の活動に、大いに期待しております。

竹内惣さんのお話

より

「図書館」をわかりやすく説明すると「公共図書館は税金を」持ち寄る、(その財源をどう使うかを考え、方針を)まとめる、(方針に従って本などの資料を買い探しやすいように系統的に)まとめられたものを住民が利用する、つまり、皆で「分け合う」ということばで表現できる。

(日本図書館協会も地域での文庫活動も、規模は違いますが、「持ち寄る」「まとめる」「分け合う」活動といえる。それをしていると、共通点が見つかる。共通性を認めたとでの相違点は、考えやすく、その話し合いは実りが多い。新しい展望も開けてくる。

今から35年前、中国では明が清に攻められて滅亡した。その時、

朱舜水しゆんすいという学者が、日本に亡命した。(徳川千代將軍家綱の時代) 朱舜水は徳川光圀に迎えられ、水戸で晩年を過ごした。彼の思想は光圀が編纂した『大日本史』に活かされたという。

19と20世紀にかけて、中国では清を倒し漢民族の新しい国を作ろうという運動が起った。日清戦争の後、中国から日本へ多くの留学生が来たが、その人たちは日本の図書館で朱舜水の本を見つけ、それを書き写し、東京で出版して、密かに中国本土へ送った。そして漢民族の国を興す運動を助けた。朱舜水の死後、20年以上が経つていた。著者は亡くなつても、その思いは本の中に生き続け、そして図書館がそれを護つていたので。

図書館といふのは、時間と空間を越えて息の長い仕事をする所である。我々は、息の長い考え方を持たなければならぬ、という事

ではないか。

これは学校教育についてもいえる事だ。「教育上の新しい理論を實踐するのには、その授業を聞いた学生達が、校長になるまでの時間が必要だ」と、かつてアメリカの大学で学んだ。

それまでのやり方を、変えるのには、議論や実践を繰り返して、長い時間をかけて慎重に進めねばならない。教育とはそういうものなのだ、と感じ入った。

図書館は人間の一生よりもはるかに長い命を持つ。今は存在さえしない、遠い未来の利用者のため、いつも過去と現在の人の考えを、持ち寄り、まとめ、分け合つて、新しい未来を創造していくのだと思つた。

もうひとつ、息の長い夢を――50億年後頃に地球は滅びるといわれている。その時人類は、新しいノアの箱舟を仕立てて

宇宙空間へ飛び出して行く事だろう。その宇宙船に私は、図書館を積むと思つた。それがどんな形になるかはわからない。が、人間が人間である限り、過去の事を調べて、現在を考え、そして未来を設計する。人間がそういう動物である限り、地球を離れてどこで生きて行こうと、ものを考えるための材料を必要とする。

という訳で、私は50億年後の地球から出て行くノアの箱舟に期待している。それは、人間の感覚と思考と行動への信頼であると共に、その人間活動を支える基盤としての図書館への信頼なのである。

